

ハワイ日系アメリカ文学について

— Kodomo no tameni — を通じて

Japanese American Literature in Hawaii

— From Kodomo no tameni —

山本茂美

Shigemi YAMAMOTO

はじめに

筆者は数年にわたってアメリカ合衆国のロサンゼルスで出されている『羅府新報』の中から日系アメリカ文学の背景、更には、文学作品が発展する過程を研究してきた。しかし、ここで本土の作品だけではなくハワイの作品にも目を向けてみたいと考えた。二十年近く前に名古屋にTAとして来ていたある日系三世の女性に一冊の本を手渡されていた。これは、当時の日系社会を研究する大切な資料になると言われ大切に保管していたものである。その後今までの研究の流れでなかなかハワイに視点を向けるチャンスがなかった。しかしアメリカ日系文学を研究する中でハワイの作品を研究することの必要性を今強く感じている。

今回この本の内容を改めて研究する中で、本土とハワイの日系アメリカ文学の特徴の比較研究できたらと考えている。

1 日系アメリカ人としてのハワイの特徴

(1) 人口について

ハワイ州には合衆国本土とは違い高い割合の日系人がいる。2000年合衆国の国勢データによれば、日系アメリカ人の全米総数人口に

占める割合は0.4% (281,421,906人中1,148,932人) であるのに対して、ハワイ州だけ見ると州人口の24.5% (1,211,537人中296,674人) を占めている^{注1}。これは住民のルーツ順に並べた時第一位の数字である。この割合からもわかるように、日系人がハワイの社会でどれだけ高い割合で生活し、ハワイの社会の中心的立場を占めているかが推測される。これが、ハワイ州での日系アメリカ人の最大の特徴である。

それでは、過去においてはどうだっただろうか？ データーによると1920年には、日系人人口はハワイ州の50.7%を占めたこともある。しかしこの比率は第二次世界大戦後ハワイ全体の人口が急増したことにより下がっていく^{注2}。このような数字からも、当時の日系アメリカ人の生活の様子、立場など推測される部分が多くあると考えられる。

(2) 社会的特徴

日系アメリカ人に対してまずきわだった特徴は、教育に対する統計である。本土も同様であるが、日系社会において一世が何より力を入れたのが二世に対する教育だった。そこで日系アメリカ人の高卒大卒以上の割合が非

常に高く、ハワイ州でも他の州に比べてかなり高くなっている。しかし残念ながら白人の値よりも低いのは生活水準だけでなく人種的な諸問題の関係であろうことも推測される。

それでは、その経済的な問題はどうか。2000年のデータによると、ハワイ州の日系アメリカ人の収入中間値は69,214ドルで白人や他のアジア系移民より高い。しかし、年収200,000ドル以上の世帯の割合を比べると、日系人は、白人や中国系などの人口に比べて低く、裕福な層はやや少ないことが分かる^{注3}。

ここで日系人の仕事についても考えてみたい。彼らは、どのような仕事についているのであろうか。まず考えなければならないのは、日系人のハワイへの移民の経緯である。

1900年初め、日本から多くの日本人がプランテーションの働き手としてハワイに移民した。そこでは、不当な労働条件のもとで、厳しい生活を強いられてきた。そこで初期の移民の大半は、農業従事者である。しかし、現在は、白人以上に管理職についたり、公務員になる割合が増えている。これは、過去、日系一世、二世がどれほど困難を乗り越えて社会的地位を確立していったかがわかる。

現在までに、特徴となる有名人には次のような人物がいる。

- ・ダニエル・イノウエ連邦上院議員
- ・スパーク・マツナガ元連邦上・下院議員
- ・ジョージ・アリエシ元ハワイ州知事
- ・エリソン・オズカ宇宙飛行士など^{注4}

ここからもわかるように公けの機関での高い地位に就く割合がとても高い。これは、本来日本人が持つ勤勉で努力家である性質を背景していると考えられる。

以上から、ハワイ日系人は他の民族グループよりも教育や経済の達成度が高く、中間層や中上層に数多く位置していることがわかる。

この事は、確実に社会で新しい生活を確立する能力を持つ証拠であり、後の子孫にも受け継がれている。アメリカ合衆国においては、日系人はマイノリティーグループではあるが、ハワイ州においては少し異なっている。この事が次に考察をすすめる文学的モチーフにおいても違いが生じている。

2 ハワイの日系アメリカ文学について

さてこのようなハワイの中で、どのように日系アメリカ文学が発展していったかを考えてみたい。日系アメリカ文学を特徴づける主なるものは、第二次世界大戦中の収容体験を語っているという事である。確かに日系二世のアメリカ人は、アメリカ人としての国籍を持っていたにも関わらず強制収容所に入れられた事で自らのアイデンティティーを見失った。そして、その体験を長い間語る事無く、恥として隠し続けていた。しかし、この体験が日系人の人種差別と結びついて文学が表現されているものは少ない。1つの過程として述べられる事はあっても、あえてそれを前面に出した作品ではない。今まで自らが研究してきた日系アメリカ文学は、収容体験と、まわりの日系人とのかかわり、又は、自らが日系アメリカ人なのか、日本人でしかないのか、という葛藤が主であった。

それではハワイの文学はどうであろうか。それには、まずハワイの日系人の性質を述べてみたい。

ハワイの日系人の間には数多くの一種独特の言葉がある。辛抱人、条約、オールメン、仕事人、オキンタマメン、信用メン、ハッピー等である。これらの多くは日本とは異質な文化と人種、社会の構造と価値観の支配するハワイという枠組みの中で、戸惑いながらもたくましく、時にはふてぶてしく、日本的な視界をあるいは使い分け、あるいは作り変えな

から自らがおかれた状況に立ち向かってきた状況を示している。

ハワイ日系人のシンボリズムの主格は「辛抱人」である。しかしハワイにおいて辛抱はただじっと我慢するといったものではなく、もっと積極的で能動的である日本出国の折の目標達成のための努力の姿勢やそれに似た、または関連した人間の在り方を示している。辛抱人はほめ言葉である。

このような背景とともに考えなければならぬのは、歴史的事実である。ハワイの日系アメリカ人は、第二次世界大戦中の扱いが、本土とは少し異なっているのである。真珠湾攻撃後、アメリカ政府は、全土の日系アメリカ人処遇を考えた。しかし、本土の日系人の状況と違い、先に述べたようにハワイの社会では人口の比率からも社会構造からも、日系人を排除した後、ハワイが機能するのはとても困難であった。そこで、日本と深くつながりのある指導者等を除き彼らの大半は強制収容所に送られる事はなかった。その為文学作品の構成の中でも、そのような収容所体験の作品を見るのは、極めて難しい。その反面プランテーション等の労働面での日系人に対する人種差別（一世、二世の例）等が主となっている^{注5}。

どちらにしても注目しなければならないのは、自分は何者であろうか？という問いかけにみられるアイデンティティーの模索である。これは本土の文学と共通のテーマである事はよく理解できる。

ハワイ生まれの日系二世の作家 Jessica Kawasuna Saiki は移民の父親と、写真花嫁の母をモチーフにした、自己体験記 *From the Lanai and Other Hawaii Stories* (1991 出版) を書いた。この本の中では太平洋戦争前後の人種差別について、更には日本の家長制度を受け継いだ父親と、アメリカナイズし

た子供達の間で確執が書かれている。

又、マウイ島の Hanaina で生まれ、Puukoolii のプランテーションで育った日系二世の Milton Atsushi Murayama は、その経験を本に書いた。その基礎となるのはプランテーションでの人種差別と、世代間の確執だった。

ハワイではかつてのプランテーションの人種階層別職業構造が、その居住地に反映され、今の人種階層を構成している。そこでこの問題が文学作品に登場することが極めて多くなるようだ。かつて研究した「写真花嫁」の作品の中でもハワイのプランテーションでの劣悪な環境と不当な扱いについて詳しく描写している。毎日毎日わずかのお金のために一日中不当な扱いに耐えて多くの日系人は生活していた。どんなに苦しい生活でも、彼らには別の生き方が見つからず、黙って耐えるしかなかった。そのため、家族の中で波風が立ち多くの文学作品のモチーフにされてきた。

第二次世界大戦勃発により、本土の日系人はたとえそれがアメリカで生まれた二世でさえ強制収容所に入れられた。そこで、数々の苦難を体験することになる。戦後彼らは、この体験を恥と考え決して口にすることもなく沈黙を保ってきた。しかし市民的自由法が成立する際、ヒヤリング調査が行われ、少しずつその体験が文学作品という形で登場した。だが、彼らの文学という形に変えられた心の叫びは、なかなか出版される可能性がなく長い間世に出ることがなかった。近年彼らの作品が多くの人々の目に触れることになり、当時の日系人の扱いがいかに不当であったか、そしていかに従順にアメリカ国家のために長く耐えていたかを知らしめている。

一方ハワイでは、僧侶や日本語学校の教師という指導的立場にあるもののみで、全員収容される事はなかった。これは、先にも述べたように日系人がいなくなったときハワイ社

会が機能しなくなるからだと言われている。そこで、ハワイの日系二世の日系人の文学は、人種問題や一世二世との確執などが主なテーマになっている。日系一世が渡米したとき、彼らが結婚するには写真結婚しか道がなかった。しかし、長年仕事にあけくれた彼らは、30代、40代の年齢に達していた。そこで若いころの写真を送ったり他人の写真を送ることでいわゆる相手をだますという結果になったケースも多かった。子供が生まれてからも、年齢が離れすぎていること、アメリカ社会で子供が育ちアメリカ人であることにより親子の間では、数々の摩擦が生じたのである。この事をテーマにした作品が、ハワイの日系アメリカ文学では多くみられるのである。

3 ハワイ日系アメリカ文学作品の考察

さてここで、多くの作品の中から先に述べられていない二つの本を考察していきたい。一冊は、日系人に対する歴史、文化さらには日々の生活について説明した次世代に語る作品であり、もう一冊は、第二次世界大戦により引き裂かれた家族について語られた作品である。

(1) *Kodomo no tameni* —For the sake of the children— Dannis M.Ogawa 1978年

この本は The University Press of Hawaii によって出版された。筆者がこの本を手に入れたのは、15年ほど前のことである。当時名古屋市の外人講師をしていた日系三世の先生と日系人の文学の研究の話をした時、彼女の出身のハワイ大学で研究されているこの本を紹介してくれた。文学作品というよりは、先に示したように次世代の子供の為に、自分たちの経験を伝えようとした趣旨が強いように思われるが、この本の中には、ノンフィ

クションの、様々な一世の経験や考えが語られている。この本の最初には、次のように書かれている。

It is a story we need to hear and hear from as we read daily of how ethnic trihalism in other parts of the world are tearing nations apa

Daniel Ogawaは、どのようにハワイの日系アメリカ人が絶えずアメリカ社会で日本とのつながりを保ってきたか伝えようとしたと述べられている。さらに、ハワイ日系アメリカ人についてこのように述べられている。

「新しい社会で生きることは、真実だが、民族主義やリベラルは、個人主義の中で生きている。第二次世界大戦後自らのルーツを省みる運動が始まった…もはや色や宗教、他の民族の象徴で区別できない。

日系アメリカ人がどのように劇的社会の変化に入り個人の権利を達成したかを示す。たとえば日本の仏教はハワイではアメリカナイズされている。日本で言う『裏盆』は仏教用語だったが、現在では、アメリカのハワイ島でもはや仏教的なものではなく地元のお祭りになっている。しかし、形を変わっていてもやはり仏教は大切にされている。」

さらに、日系人に対して次のようにも書かれている。

「Ogawaは、日系人がどのようにハワイの環境に溶け込んだかを説明している。しかし、彼らはどんなに社会に溶け込んでも根本で「恥」、「恩」、「義理」というものを大切に消えることがない。そして新しい形で日系三世、四世の中にも引き継がれている。…成功はアメリカの環境のなかでとてもフィットする。しかし、日系人は自分のためではなく家族のために働いていたが、三世、四世にとっ

て成功は個人のものになっている。それでも、ハワイでの日本人の経験でもっともみりよくてきなことの一つは、経済的成功が、家族の間の思いやりを壊さないということである。」

「Ogawa は、どのように人は民族主義や人種主義の最高のいくつかを持つことができるかも示している。Ogawa の説によると、人間性を破壊するというよりはむしろ豊かにする…」とある。

以上の観点からこの本は監修されている。次に本の構成について考えていきたい。

まずこの本の内容について紹介したい。この本は全部で14章からなりたっている。

Chapter One: Like Waves They Came

Chapter Two: Their Great Thirst

Chapter Three: Eiju Dochyaku

Chapter Four: To Weep into Silence?

Chapter Five: The New Americans

Chapter Six: A Question of Loyalty

Chapter Seven: Shall the japs Dominate Hawaii?

Chapter Eight: A Generation on Trial

Chapter Nine: Okage Sama De

Chapter Ten: The Bloodless Revolution

Chapter Eleven: The Romantic Revolution

Chapter Twelve: The Spoiled Generation?

Chapter Thirteen: The New Hawaii

Chapter Fourteen: Toward a New Hawaiian Consensus

KODOMO NO TAME NI

それぞれの章には、4～5の様々な観点から書かれた逸話実体験の作品が紹介されている。ここではその中から、2つの内容を紹介したい。

Chapter One: Like Waves They came
の中では、日系一世が日本からアメリカに渡った経緯が示されている。ここでは先にも述べたハワイの日系アメリカ一世二世の歴史を紹介している。そして、日系人の background の紹介、日系人の移民の統計の分析もされている。そして、その章の最後には Yamashiro Maru に乗ってハワイにやってきた若者 Yoshio の自叙伝が示されている。当時の日本での様子、どのような若者が渡米したのか…などの歴史的資料としても大いに役に立つ内容となっている。

もうひとつ、今までに「写真花嫁」についての文学を研究してきたため、大いに興味を持った内容を紹介したい。Chapter Eleven の The Romantic Revolution である。

この作品では、かつての一世の「写真花嫁」の時代の様々な苦労や悲惨な歴史について紹介されている。しかし、特に注目したいのは、排日移民法が成立した1924年以降の結婚についてである。二世たちは一世達と違い、お互いに愛し合い結婚するようになっていた。そこで一世のような花嫁の価値観が崩れていく。

A wife is not considered to be an ornament, an image of uncompromising adoration. She is a functional unit who comprehends her role and performs accordingly…

ある夫は語っている、妻に仕事があれば二人で家庭の仕事を分け合う、妻が仕事を持つ事は自分達の生活にとって幸せである。…と。

My parents ideas on the freedom of women, the independence of children are entirely different from mine. They make their daughters obey them, and find the husbands and wives for their children and force them to marry. I believe in the absolute freedom of women, to go with

whom they please, and wherever they want^{注6}.

この作品では、まさに一世二世の間の確執をあらわした代表的な内容であり、作者がどちらの世代に対しても知ってほしいことを伝えたことになるのであろう。この章ではさらに、ある日系人の女性がどのように1人の男性と恋に落ち、つきあってきたか、若い頃の回想を示す作品が紹介されている。

このように本全体で、様々な一世の過去の記録を紹介する事により、なかなか意志が通じ合わない世代への橋渡しとして、大いに役割を果たす本である。

(2) OUR HOUSE DIVIDEd 一第二次世界大戦下のハワイ日系七家族

この本は Tomi Kaizawa Knaeflet という広島出身の日系アメリカ人のジャーナリストによって書かれたものである。Tomi は1929年にハワイの砂糖きび農場のバホア村で生まれた。1952年以来ホノルル・スター・プリティン紙の記者をしている。文筆活動で数々の賞を受賞し、ニュース、特殊記事ではホノルル・プレスクラブ賞が授与され、医療記事はハワイ医療協会、アメリカがん協会、アメリカ心理協会より表彰される。1992年、全米女性著作者連盟ホノルル支部からライフタイム・アチーブメント・アワード（終身功労賞）を授与された。（著者紹介より）

作者の前書きには、次のように書かれている。

「この本は日系アメリカ人の話であると同時に、日本国民についての物語であり、ハワイおよびアメリカ合衆国の本であると同時に、日本についての本でもある。…

第二次世界大戦中をハワイの日系アメリカ人七家族が生きぬいた姿がこの本の核心であり、七つの家族のひとつひとつの物語は、わ

れわれすべてにとって無関心ではありえない内容です。つまり、これはあのいまわしい戦争の業火を全身にあびた日本とアメリカというふたつの文化を吸収して育ってきた日系アメリカ人のすべてにあてはまる物語なのです。…

私はこの本でひとりひとりの人生に戦争がどのような影響を及ぼしたかを一貫して追求したつもりです^{注7}。」

本にはタイトルにもあるように家族の戦時中の出来事が書かれている。

作者の回顧録には次のように書かれている。「取材した『引き裂かれた家族』の人々と同様、私も戦争が引き起こした内面の葛藤の重苦しさにあえぎ、その重さのあまり、自分の戦争中の体験を考えないようにしてきた。…」

この思いは本土の日系アメリカ文学について研究した時、何度も目にしたものである。自分達は罪人なのではないか…という思いが、長い年月の間口を閉ざしてしまったのである。この作者も、取材の形で七つの家族の物語を聞いた時、同じような苦しさに数々直面したという。

筆者が、この本の中で特に興味を持ったのは、今までの作品にはない、日本に帰った日系人にまで踏み込んだ作品になっている事である。一方的に日系人の思いを伝えるのではなく、日系人の実家の人々、帰米日系人についても語られている事が、比較して日系人の気持ちの理解を深めるのに役立っていると考ええる。

第一話 ミホの物語

父はアメリカ本土の強制収容所、息子は第442戦闘連隊でヨーロッパ戦線に従事、娘は日本で広島原爆の惨禍を間近に見る。

第二話 アサミ家の物語

開戦の日の深夜、ジャーナリストの父はFBIに連行され、日米交換船で帰国の途中、

シンガポールで徴用されて家族は離散，息子はマレー半島の日本軍兵営で終戦を迎える。

第三話 タナカ家の物語

有刺鉄線に囲まれた強制収容所の母に息子から手紙が届き、「私は今，アメリカの軍人です…必要とあらばアメリカのために命を捧げます…」とあり，がく然とする。

第四話 エンプク家の物語

兄はアメリカ軍の対日特殊戦略隊隊員としてビルマ戦争に従事，戦後占領軍将校として日本に進駐し，親兄弟のいる瀬戸内海の小島を訪れる。

第五話 ミヤサト家の物語

アメリカ国籍の青年は，戦時中，敵国民として，警察と憲兵に監視されつつ外務省の特殊学校で過ごし，戦後アメリカの市民権回復に苦心する。

第六話 フジワラ家の物語

日本軍兵士として広島で被爆し，死線を脱した二重国籍の青年，その兄たちは第442戦闘連隊でヨーロッパ戦線にいた。

第七話 ヤマモト家の物語

アメリカ本土の強制収容所で終戦を迎えた夫は，祖国の勝利を信じて帰国するが日本は敗戦，妻と次女は広島で被爆して死亡していた。

このおおまかな内容をも，いかに日系人達が残酷な現実の中で生きてきたかがわかる。このような内容の本は，今後多くの文学作品の中で新たなモチーフとしてさらに使われるようになるであろう。

この本のエピローグにはこのように書かれている。

『引き裂かれた家族』の物語のメッセージは—「祖国同志が戦わざるをえなくなったとき，その戦争がどんなに過酷に肉親を引き裂くことも，家族にとって何よりも大切なことは，

兄弟から兄弟へと伝わる…互いの，人間同志の愛であり，それは，決して引き裂かれることなく脈々と生き続けるということである^{註8}。』

おわりに

今回は，今までと違いアメリカ合衆国本土の日系アメリカ文学作品を離れ，ハワイの文学について考察することになり，同じ日系アメリカ文学でも大きな違いがある事が改めてわかった。ハワイの作品を調べていくうちに，いかにアメリカ合衆国本土の日系アメリカ人の歴史が，人生が強制収容所に入れられた事に大きく影響されたかが改めて理解できた。今回の研究対象にした2冊は，テーマが特殊なものだと思われるかも知れない。しかし，自分達の過去を形として残そうとした日系人達の言葉をしっかり受け取ることができた。現在「羅府新報」というロスアンゼルスで発刊されている新聞の中の文学作品の追跡を中心に研究をしている。年を追うごとに文学作品という形で自分達の思いを表現できるようになっていく過程を今後整理して，研究に加えていきたい。

注

- 1 中鉢奈津子，「ハワイ日系人社会の特徴」，外務省調査月報，2007，No 4，p34.
- 2 中鉢，p86.
- 3 中鉢，p41.
- 4 中鉢，p46.
- 5 前山隆，「ハワイの辛抱人」，お茶の水書房，東京，pi.
- 6 Dennis Ogawa, *Kodomo no tamen*, Department of American Studies, University of Hawaii at Manoa Honolulu, Hawaii, 910822, 1978, p414.
- 7 Tomi Kaizawa Knaefler, *OUR HOUSE DIVIDED, Seven Japanese American Families in World War II*, p192.

Work Cited

- 1 中鉢奈津子, ハワイ日系人社会の特徴, 外務省調査月報, 2007, No 4.
- 2 前山隆, 「ハワイの辛抱人」, お茶の水書房, 東京.
- 3 Dennis Ogawa, Kodomo no tamen, Department of American Studies, University of Hawaii at Manoa Honolulu, Hawaii, 910822, 1978, Dennis Ogawa, Kodomo no tamen, Department of American Studies, University of Hawaii at Manoa Honolulu, Hawaii, 910822, 1978.
- 4 Tomi Kaizawa Knaefler, OUR HOUSE DIVIDED, Seven Japanese American Families in World War II, p192.

Work Consulted

- 1 Ind, Andrew W. Hawaii's Japanese. Princeton.: Princeton University Press, 1946
- 2 Nordyke, Eleanor C. The Peapling of Hawaii's 2nd ed. Honolulu: University of Hawaii Press, 1989
- 3 Odo, Franklin, and Kazuko Sinoto. A Pictorial History of the Japanese in Hawai'i 1885-1924. Honolulu: Bishop Museum Press, 1985.
- 4 Schmitt, Robert C. Historical Statistics of Hawaii. Honolulu: The University Press of Hawaii, 1977.
- 5 Stephan, John J. Hawaii under the Rising Sun: Japan's Plans for Conquest after Pearl Harbor. Honolulu: University of Hawaii Press. 1984.